

青年訓練所・青年学校と高橋峯次郎

米田俊彦

Youth Training Center/Youth School and TAKAHASHI Minejiro

- ①はじめに
- ②青年訓練所・青年学校における訓練の実態
- ③青年訓練所・青年学校の諸活動、諸実態
- ④青年訓練所・青年学校の教員
- ⑤少年団・青年団
- ⑥青年たちの銃後活動
- ⑦高橋峯次郎の青年教育論、青年への期待と不満
- ⑧「満洲」への誘い
- ⑨先輩の青年たちからのメッセージ
- ⑩おわりに

【論文要旨】

藤根村の在郷軍人分会会報『真友』には青年訓練所・青年学校の教育活動の実態やその教師（指導員）であった高橋峯次郎の考え方を伝える記事が多数掲載されている。それらを拾い出し、分類整理して青年訓練所・青年学校および峯次郎の実態を再構成してみた。

青年訓練所・青年学校での活動としては、やはり軍事訓練ないし演習がその中心であったことが改めて確認された。軍の直接的な関与も強く推測された。

峯次郎は、いわば素朴な国家主義者であったが、特に一九三〇年代以降、「村」や「百姓」（農業）を守ることを農業を通じての人間形成に強いこだわりを示すようになる。峯次郎は教練の指導員ではなかったが、青年訓練所・青年学校の生徒たちから慕われたらしく、兵となって村を離れた青年たちは峯次郎に対する感謝の気持ちを表明するとともに、後輩たちを厳しく訓練することを峯次郎に期待した。村を守ろうとす

る峯次郎の存在が軍隊生活を送る青年たちの心の拠り所になったものと推察される。『真友』の記事全体を通して、青年訓練所・青年学校やその指導員が村の青年たちを兵士に仕立て上げるうえで果たした役割の大きさがうかがえる。

①はじめに

高橋峯次郎は一九三二年三月二日に藤根尋常小学校の訓導を辞職し、その直後の四月五日に藤根青年訓練所指導員となった（峯次郎が小学校教員となったのは一九〇三年、藤根小学校の教員は〇六年から）。三五年に青年訓練所が実業補習学校と統合されて青年学校となった後も引き続きその指導員を続け、おそらくその関連で敗戦後の四七年四月、新制藤根中学校の助教諭となつてゐる（四九年退職）¹⁾。

青年訓練所や青年学校は教練を中心とした教育・訓練機関であり、一九三七年まではここで一定時数の教練を受けると兵役が半年短縮されるという特典が与えられていた（この特典は日中戦争を受けての三八年の「兵役法」の改正で撤廃されるとともに、三九年度から男子に限つて青年学校への就学が下の学年から義務化）。三八年度までは義務教育機関ではなかったが、この特典のために、あるいはそれに加えてのさまざまな地域レベルでの勧誘の結果、多くの青年がここに通つてゐた。青年訓練所・青年学校は、青年たちにとつて地域と軍隊を結ぶ機関、もう少し踏み込んで言えば地域の青年たちを「兵」に仕立て上げる基礎課程であつた。

高橋峯次郎は帝国在郷軍人会の藤根村分会に深く関与してゐた。一九一〇年に分会が創立された時、高橋は副長（分会長に次ぐポスト）であり、三二年から三五年まで分会長であつた。そして何よりも一九〇八年から四二年まで刊行され続けた分会報『真友』（刊行当初は真友会報）の編集・印刷人であつた。小学校の先生と在郷軍人会の熱心な活動家という二つの顔をもつてゐた高橋にとつて、青年訓練所・青年学校の指導員は最も適的なポストだったと言えよう。

その『真友』には青年訓練所・青年学校関係の記事が多く出ている。

必ずしも系統的な情報ではないが、青年訓練所や青年学校の実態、あるいは高橋の考え方などがある程度知ることができる。青年訓練所・青年学校はほとんどが小学校に付設され、専任教員がきわめて少なかったうえに戦後の新学制の発足にあつて廃止されたため、地域レベルでの教育活動の実態はほとんど明らかにされていない。その意味で『真友』は青年訓練所・青年学校研究にとつても貴重な資料である。本稿では『真友』を主たる素材にして藤根青年訓練所・青年学校の教育活動の実態を明らかにしつつ、村の青年たちが「兵」に仕立てられていくにあつた青年訓練所・青年学校やその指導員・峯次郎の役割を考察することにしたい。

なお、藤井忠俊論文において『真友』の全般的な内容の分析がなされている。本稿はその分析をふまえたものである。とりわけ少年団については、その発足の経緯やその創設者でもある高橋の考え方などについて詳細に論じられている。

ところで、本論に入る前に青年訓練所・青年学校の制度の概要について簡単に確認をしておきたい。²⁾

青年訓練所の制度は一九二六年の「青年訓練所令」（勅令第七十号）と「青年訓練所規程」（文部省令第十六号）によつて定められた。目的は「青年ノ心身ヲ鍛錬シテ国民タルノ資質ヲ向上セシムル」（令第一条）こととされた。訓練の対象は十六歳から二十歳までの男子、訓練時間は四年間を通じて修身及公民科一〇〇時以上、教練四〇〇時以上、普通学科二〇〇時以上、職業科一〇〇時以上で、公立青年訓練所は実業補習学校または小学校に併置することを「常例」（規程第十六条）とし、主事の実業補習学校校長または小学校長に、指導員は実業補習学校または小学校の教員や在郷軍人等に囑託するものとされていた。³⁾ 実業補習学校は、前期課程が尋常小学校卒業で二年、後期課程が高等小学校卒業で二

三年とされていたから、青年訓練所はほぼ実業補習学校に接続する学校系統上の位置づけを与えられた。実業補習学校もほとんどが小学校に併設されていたから、中等学校に進学しない青年は二十歳まで小学校の校舎に通い続けることとなった⁽⁴⁾。

一九一〇年代から二〇年代にかけて、政府は青年団の組織化を進めていく(大日本連合青年団は二四年設立、二五年発団式)。青年団自体は軍事的性格を強く付与されなかったが、地域の青年に対する兵役前の軍事訓練や兵役(の義務)についての認識を徹底させる役割は青年訓練所が担うことになった。

青年訓練所と実業補習学校は一九三五年の「青年学校令」(勅令第四十一号)により制度的に統合された。目的は「男女青年ニ対シ其ノ心身ヲ鍛錬シ徳性ヲ涵養スルト共ニ職業及實際生活ニ須要ナル知識技能ヲ授ケ以テ国民タルノ資質ヲ向上セシムル」(第一条)こととされた。「教授及訓練期間」は尋常小学校に接続する普通科が二年、高等小学校に接続する本科が男子五年・女子三年、「教授及訓練科目」は修身及公民科、普通学科、職業科、教練科(男子)、家事及裁縫科(女子)等で、本科・男子の場合、最低時数が第一・二年で年間総時数二二〇時、うち教練七〇時、第三～五年で年間総時数一八〇時、うち教練七〇時である。実業補習学校には教練がなかったから、統合によって教練の開始年齢が引き下げられたことになる。また科目・時数の配分などからみて、青年学校は青年訓練所の性格を大きく引き継いだものと言える。

青年学校の教員は教諭、助教諭、指導員、講師に区分され、教諭には青年学校教員養成所(旧実業補習学校教員養成所)卒業者や小学校本科正教員が充当されたが、青年訓練所から引き続き指導員を置くことができるものとされた。指導員については資格要件が厳密に定められていなかった。

青年学校制度がスタートしてから三年目に入った一九三七年の七月か

ら日中戦争が始まった。戦争が拡大していくのに合わせて兵員供給の必要性が高まり、青年学校で教練を行った者に対する兵役減免の特典が撤廃されることとなった。そして特典なくして青年学校の就学者を確保することの困難が十分に予想されたため、特典撤廃と同時に青年学校の男子義務化が閣議決定された(一九三八年一月十一日)。義務制は三九年度から、普通科第一学年より学年進行で実施された。

実業補習学校も普通は青年訓練所も小学校に併設されており、義務制実施後には企業(特に工場)に私立青年学校が多く設置されたが、農村地域においては敗戦まで小学校(一九四一年度から国民学校)に併設された場合が多かった。また、義務制になったものの、一九三〇年代末からの中等学校進学者の急増や四〇年代の敗戦直前の志願兵、少年兵の増募などの結果、敗戦まで生徒数は急減していった。

以下、『真友』の記事を整理して藤根村の青年訓練所・青年学校の実態とそこでの高橋峯次郎の言動を再構成していくが、『真友』からの引用にあたっては、その号の発行年月を「」に入れて記載する。判読不能の文字がある場合は「□」で表示する。句読点は適宜補う。多くの場合各記事の冒頭には「○」「◎」等の記号が伏してあるが、引用にあたっては削除する。誤記がある場合など必要に応じて「」で訂正ないし補記する。

② 青年訓練所・青年学校における訓練の実態

『真友』には青年訓練所・青年学校における訓練、演習あるいはその成果を確認するための査閲の記事が多数出ている。その主なものをいくつか引用しておく。

「十一月二十日、稲葉ノ新校庭ニテ青年訓練所ノ査閲。藤根村、笹

間村、横川目村ノ三ヶ村。査閲官浮村中佐。【一九二六年十二月】

「五月十五日、青年訓練生総動員、盛岡親武ヶ原ニ於テ藤根村ヨリ六十五名出席セリ。仁王小学校二一泊（会費七十銭）。十六日帰村。兵営、農村、新聞社、大慈寺其他見学。」【一九二七年五月】
「二月二十六日、藤根村青年訓練所入所式、集合日一月二十七日、二十八日、二十九日、二月三日、四日。」

二月九日藤根ニ於テ武術会。教練指導員高濑、高德、泉田、伊藤ヲ新ニ増シ旧正月ヲ利用シ猛烈ナ訓練ヲヤツテキル。出席者八十七名□□。【一九二八年二月】

「十月二十日 江釣子小学校に於テ藤根江釣子両青年訓練所生の査閲あり。査閲官溝口大佐、師団より視察官として菅原少佐出張。藤根六十七名、江釣子約三十名。」【一九二八年十一月】

「十月十七日より 藤根青年訓練生六十余名藤根小学校に宿泊三日間訓練をなす。」【一九二八年十一月】

「青年訓練所は 旧正月を利用して教練をやつてゐる。毎日六、七十名出席。」【一九二九年三月】

「十月三十一日 和賀青訓黒中聯合演習。」【一九三〇年十月】

「藤根青年訓練所 に於ては農家の休日を利用して猛烈に練習。毎回の出席者は八十名乃至百名に達せり。」【一九三一年四月】

「九月十九日 藤根小学校々庭に於て笹間村横川目村藤根村の三村の青年訓練所生の査閲か〔が〕行はれた。査閲官は瀬能司令官殿。

日支衝突の報あり。緊張して受けられた。藤根訓練生九十三名有志軍人青少年団員等三百名以上参列せり。無届欠席したる青訓生二、三名あつた。【一九三二年一月】

「十一月十五日和賀、胆沢二郡の青年訓練所総動員の大演習は平和街道を中心として挙行された。東軍第一中隊黒沢尻相去六原、第二中隊黒岩立花鬼柳、第三中隊江釣子飯豊二子（約三百名）、西軍第

一中隊横川目岩崎煤孫、第二中隊藤根山口、第三中隊笹間沢内湯田（約三百名）。統監は八木大尉。午後黒中校庭にて閲兵分列等あり。」【一九三二年一月】

「十月十五日より 第八師団秋季演習は花巻から盛岡にかけて行はる。青訓生約五千名参加。藤根青訓生四十四名参加。十七日、十八日トラツクにて盛岡まで行く。」【一九三三年十月】

「二月二十九日（旧四日）より青年訓練を初〔始〕む（三十日、三十一日、一日、二日、十一日、十三日、十九日、二十一日、二十五日、二十六日）。【一九三三年三月】

「二月十一日建国祭に青少年健児の勇壮なる雪中行軍と演習を北藤根より後藤にかけて実施せり。九十余名参加。」【一九三三年三月】
「九月十七、十八日 和賀郡青年訓練所郷軍聯合演習。六原より黒沢尻にて。」【一九三四年十一月】

「十一月十七日藤根小学校にて藤根、横川目両村の青年学校生徒及未入営兵の査閲あり。査閲官林少佐。」【一九三五年十一月】

「十月二十九日、三十日藤根青年訓練生四十名盛岡に於ける陸軍機動演習に参加。秩父宮殿下の御親閲を受く。」【一九三五年十一月】

「十一月二十三日和賀郡中央部十ヶ町村青年学校聯合演習。藤根、江釣子に於て行ひ、参加人員一千名。」【一九三七年一月】

「青年学校で十二月二十八日から五日間、冬期修養道場を開いた。青年団の寒稽古武道練習会を大にやれ。まだやらない部落もある。夜学もやれ。非常時だ。口先ばかりうまくても敵が逃げない。」【一九三八年一月】

「岩手県下学徒聯合演習 十一月三日、四日の二日間、雨雲深き後藤野原に於て攻防演習を行ふ。東軍は黒沢尻に集結、三日夜滑田、藤根、笹間に宿営し、西軍は飛行場に〔宿営した〕。四日午前三時より行動を開始。四時半より一斉に攻撃に移り、白兵戦を反復し、

東軍は陣地内に突入。六時半休戦。八時三十分より閲兵分列式。十時より〔陸軍飛行場の〕工事竣工式挙行。【一九三九年十二月】

「十八日は藤根小学校に於て飯豊、笹間、藤根三村の青年学校の査閲を執行せり。査閲官村上大佐。成績は、優良は飯豊、良好笹間と藤根の二村。【一九四〇年十一月】

「十月二十四日、二十五日、和賀郡下青年学校聯合演習が行はれた。西軍は横川目に集合、藤根駅附近で東軍と会戦。煤孫学校に宿泊、二十五日黒沢尻にて終了。西軍の大隊長〔は〕高橋徳兵衛氏であつた。【一九四一年十二月】

「十月三十日、藤根青年学校訓練状況県官及支会指導員の視察あり。【一九四一年十二月】

「十一月十九日、藤根横川目両村青年学校教練査閲が藤根校庭で施行された、査閲官高橋憲治少佐出席。生徒横川目八十名、藤根百五十名。【一九四一年十二月】

「三月十四日江釣子国民学校に於て藤根、江釣子両青年学校生徒の学科査閲を行ふ。【一九四二年三月】

「十月二日、藤根学校にて笹間、横川目、藤根、三青年学校の査閲が行はれ、藤根優、笹間、横川目良と認めらる。【一九四二年十二月】

「笹間、横川目、岩崎、江釣子、藤根五ヶ村の青年学校生徒の特別合宿訓練があり、三百名。【一九四二年十二月】

「七月十六、七日、青年学校行軍。川尻沢内雫石盛岡方面。【一九四三年冬】

多数の記事を引用することになったが、日常の学校単位の訓練の他に郡や県などを単位とする、しかもさまざまな形態の訓練や演習が行われていたことがうかがえる。規模の大きな演習は軍が直接組織、指導していたことが強く推測される。査閲という評価システムがかなり厳格に作

動していたこともわかる。青年訓練所・青年学校はまさに軍隊の入り口であり、軍隊と地続きの組織だったと言ってよいだろう。

③青年訓練所・青年学校の諸活動、諸実態

訓練以外の様子を伝える記事を拾い出してみる。

「十二月二十四日、青年訓練所ノ修了式（第一年次）。【一九二六年十二月】

「第三回建国祭 二月十一日紀元節ニ、午前十時藤根小学校ニ於テ。在郷軍人会、青年訓練所、□□少年団集合。【一九二八年二月】

「十月十日 大本営前で御親閲式。一万三千の各団体、藤根村より高橋逸郎、柏葉甚作、柏葉右エ門、高橋久内、青年訓練生十六名、少年団員十一名、青年〔団員？〕十名、消防員六名出席。【一九二八年十一月】

「本年青訓に入るべき者 熊谷幸三郎 池田秀幸 高橋福治 伊藤孫左エ門 加藤久吉 高橋治五郎 高橋一四郎 藤枝吉郎 菊池定王 小原長一 小原権之助 高橋一行 高橋丑太郎 高橋理平 高橋作太郎 斎藤武雄 高橋安雄 藤枝一夫 高橋喜間 田鎖作松 高橋清徳 高橋孝一 高橋正志 柏葉由吉【一九三〇年一月】

「青訓学科 師団配置十七個師団 近衛東京 第一東京 第二仙台 第三名古屋 第四大阪 第五広島 第六熊本 第七旭川 第八弘前 第九金沢 第十姫路 第十一善通寺 第十二久留米 第十四宇都宮 第十六京都 第十九羅南 第二十竜山 守備隊台湾 関東州 満州〔後略、この後常備兵数、師団の編成、海軍区、軍艦戦艦、兵種、兵役、海軍常備兵役の各項目にわたり同じように記載されている。青年訓練所で教えている「学科」の内容を列挙したものと推測され

る。】【一九三〇年一月】

「藤根青年訓練所生徒数 一年次三七 二年次一八 三年次三一
四年次二一 計一〇八」【一九三二年四月】

「青訓生 小原健、六原道場に入場せり。」【一九三二年十月】

「藤根青年学校七月一日附岩手県知事雪沢千代治殿の表彰を受く。」

【一九三七年六月】

「同〔三月〕二十四日 小学校、青年学校の卒業式。」【一九四〇年
四月】

「五月二十二日宮城前で行はれる青年訓練実施十五周年記念の全国
青年学校代表三万余名の御親閲に参加する青年は、藤根村より高橋
栄、伊藤孫十の二名が選ばれました。」【一九四一年五月】

「青年学校学務委員 小原久蔵 高橋藤作 藤枝忠雄 加藤勝之助
高橋峯次郎」【一九四一年五月】

雑多な内容のことが系統性もなく出てくる。時期も違うのでこれらの
情報によって青年学校の日常活動を忠実に再構成することは困難であ
る。

ここではいくつものことについて補足しておくにとどめたい。

一九三一年四月の記事に青年訓練所の生徒数が出ている。高橋家から
発見された資料の中に、「藤根青年訓練所と同青年学校」と書かれた表
紙を付けて綴じられた文書があり、そこに二六年から四四年までの生徒
数が列記されている。次の通りである。

二六年	五五人	二七年	八一人	二八年	七六人
二九年	九三人	三〇年	九五五	三一年	一〇八人
三二年	一〇九人	三三年	一一四人	三四年	一二四人
三五年	一三二人	三六年	一三二人	三七年	一三九人
三八年	一三六人	三九年	九九九	四〇年	八九九
四一年	一〇七人	四二年	七二人	四三年	六五人

四四年 八二人 四五年 六三人 四六年 八一人

一九三一年の一〇八人という数字は『真友』の記事と一致している。
青年訓練所は男子のみ、青年学校は男女なので、一九三五年以降は女子
を含んだ数字である。この資料では男女の内訳がわからないので、訓練
所から学校になって以降の男子生徒の増減が判然としない。

高橋家から出てきた資料に「昭和十六年度 往復文書綴甲号 藤根青
年学校」と記載された表紙に綴じられた文書があり、そこに「在籍者
数」と「在籍者数」の表がある。「在籍者出稼状況調」の表があるから
「在籍者」は出稼ぎで村を離れている者を除外した数字であることがわ
かる。在籍者の合計は男一六二人、女六六人、在籍者の合計は男一二七
人、女六五人となっている。ただし研究科（本科を修了してからさらに
継続して学ぶ課程）の生徒を除けば在籍者は男一四四人、女五一人、在
校者は男一一四人、女五一人である。

「藤根青年訓練所と同青年学校」に出ている生徒数が実際に出席して
各学年を修了した人数に限定した数字なのかもしれない。「青年訓練
所・青年学校における訓練の実態」で取り上げた『真友』の記事によれ
ば、訓練に参加している生徒の数は一〇〇人弱だったらしいので、「往
復文書綴」の数字は名目的な部分を含んでいたものと推察される。いず
れにしても青年訓練所・青年学校は特定の日・時間に限って教育活動を
行う機関であったから、実際に即した生徒数は把握しにくい。

一九三七年に藤根青年学校が県から表彰されている。表彰の趣旨がわ
からないが、三三年に表彰された同じ和賀郡の広根村の青年訓練所が表
彰された際の表彰状の文面が『真友』の三三年三月号に出ている。そこ
には「入所出席並施設経営良娘〔好〕ニシテ成績優良ナリ仍テ表彰旗ヲ
授与シ茲ニ之ヲ表彰ス」とある。旗をもらえとなれば、共同の訓練や
演習の際に際立つことになるから、この表彰はかなり現実的実意
味をもったかもしれない。

一九三二年六月号に「青訓生 小原健、六原道場に入場せり。」という記事が出ています。「六原道場」とは岩手県立六原青年道場のことで、『岩手近代教育史』⁽⁵⁾によれば、岩手県知事石黒英彦の方針により胆沢郡相去村に設置された。設立に当たっては加藤完治の支援を受けている。一九三二年九月に第一回の「修練生」を入れていたので、右の記事の小原健はその第一回の修練生の一人だったと思われる。ちなみに石黒知事はこの後北海道庁長官、文部次官、大政翼賛会錬成局長を歴任する。寛克彦の教えを受けた内務官僚と言われている。

青年学校学務委員の中に高橋峯次郎の名前がある。青年学校の学務委員は「青年学校令施行規則」(一九三九年文部省令第二十四号)中に規定されており、それによれば就学の奨励・督促や学校の経営・運営に關して市町村長を補助する任務が与えられている。高橋が指導員兼学務委員として青年学校に深く関与していたことがわかる。

④ 青年訓練所・青年学校の教員

教員については次の通り異動関係のことが時々記事に出ている。

「十二月二十一日、青年訓練所指導員会議。」【一九二六年十二月】

「青年学校の加藤勝夫氏、満洲の農會主事として赴任。後任は小原賢一先生。」【一九三七年一月】

「学校職員 (小学校は省略) 青年校 小原賢一 56 斎藤タキ 20 高橋峯次郎、菊池慶蔵、加藤武、小原康志、菅沼義平、菅沼昌教。」

【一九三九年一月】

「藤根青年学校の小原賢一先生は花巻の青年学校に、後任は遠野青年学校より小原武治先生が来られた。」【一九四一年五月】

「青年学校指導員に高橋源八、高橋善一、高橋勘二の三名。」【一九四一年十二月】

「(前略) 青年学校の鈴木先生は飯豊へ、菊池英子先生が来る。(後略)」【一九四二年三月】

「簡単に木炭を製造する方法があるので、皆が喜んでやつてゐる。

知りたい方は青年学校の小原先生に伝授されて下さい。」【一九四二年十二月】

「(前略) 青年校の小原武治氏九戸郡長内青年校々長に。後に笹間より平野金一先生。(後略)」【一九四三年六月】

一九三九年の記事に八人の青年学校教員の名前が出ている。うち二人については「56」「20」という数字が付いているが、これはおそらく俸給の月額である。この二人が教諭または助教諭で、あとは指導員であろう(指導員には手当が支給される)。同じ記事に藤根小学校の教員の俸給月額が出ているが、最も低い教員でも二六円となっている。二〇円はきわめて安い。

これだけ頻繁に異動がある中で、高橋は一九三二年から戦後まで青年訓練所・青年学校の教員(指導員)を続けた。生徒たちや村の人たちに対する存在感は大きなものだったに違いない。

⑤ 少年団・青年団

「③ 青年訓練所・青年学校の諸活動、諸実態」で取り上げた記事にも少年団や青年団のことが少し出てきたが、青年訓練所・青年学校と少年団や青年団は密接な関連をもち、また相互補完的な関係にあったと考えられる。特にこの地域の少年団はきわめて早い時期から設立されたボーイスカウト系の少年団であり、しかもその設立には高橋峯次郎が深く関与していた⁽⁶⁾。ここでは少年団や青年団に深く言及することは避けるが、その活動の概略を伝える『真友』の記事をいくつか引用しておくことにしたい。

まず少年団に関する記事のうち主要なものは次の通りである。

「九月十三日、少年団乃木祭挙行。」【一九二六年九月】

「十二月十四日、入営兵及除隊兵ノ報告祭(村社ニ於テ)。少年団ノ義士祭。聖上陛下御平癒祈願。」【一九二六年十二月】

「雑誌ジャンボリーは少年団各班で買つて下さい。小さな本「御国の護り」一冊宛あげますから各班で人名を至急報告下さい(事務所まで)。」【一九二八年五月】

「六月二十三日少年団の野営実施六十三名。」【一九二八年七月】

「全国少年団総会 十二月八、九日東京青年会館にて高橋峯次郎出席。」【一九二八年十一月】

「少年団 日本聯盟総長伯爵後藤新平閣下、四月十三日午前五時三十分、京都の病院で薨去されました。七十三歳。御葬儀は十六日東京青山で行はれ、四月二十八日は追悼会。」【一九二九年五月】

「少年団の訓練は、少年の遊びたいといふ心を本として編み出されたもので、少年時代には最も必要なものである。又悪い癖を正すのも一番よい時である。そして愛国運動の土台となり実修と体験をするのである。村の少年は農事の手伝に使はれ、学校以外に修養のため親切に導いてくれる人が少ない。十年後には村の公民となり村の中堅となり粗末にされぬ。真に村を思ひ国を思ふ人士諸君の助力を願ふのである。各班に集る場所が必要。帆立小屋でもよい、又本部に事務室の必要ある。少年団の大本営となる、村の中央にあるとよろしい。」【一九二九年五月】

「乃木祭 少年団は村社に於て午後八時より乃木祭を行ひ営火、お話、天幕露営をなし、翌十四日午前六時解散せり。」【一九三〇年十月】

「三月四日 少年団の盛岡地方聯盟の総会に高橋峰次郎、加藤勝夫、高橋純逸の三名出席。」【一九三一年四月】

「二月十一日 建国祭。少年団にては国旗掲揚のポスター四百枚配布。」【一九三一年四月】

「少年団 少年団の事務所を建てたいと思つてから五、六年になるが、本年漸くできた役場のそばをかりて、色々な参考品を各地方に出てる人々から寄贈されてあるものもそこに保存したい。其他土に関する材料もあつめたい。皆さんの御援助を願ひます。」

二、道地イヌ班、後藤ネヅミ班では集合場小屋を建てた。各組の班でも改築をしてはいかが。

三、北藤根のハト班、ネコ班、ウシ班では社会奉仕としてガラスかけセトかけの投棄場をアラヤシキに設けた。よいことをした。在郷軍人高橋逸郎君と高橋秋之助君の世話で八月二十九日、三十日の二日間か、つてやつた。

四、野中のライオン班では十人位入れら「れ」る天幕を自製してキャンプを実施した。天然木綿を買つて作れば二、三円でできる。

五、雑誌ジャンボリー各班で回覧。十冊。

六、岩手県の少年団聯盟では南部伯を総理にいただいた。【一九三一年九月】

「少年団 四月二十日大班指導。五月三日鷲班指導。五月九日班長会議。五月十五日消防演習警備奉仕。」【一九三二年六月】

「九月十三日 藤根少年団の乃木祭。午後八時より事務所に於て挙行せり。」【一九三二年十月】

「一月九日(十二月十四日)少年団の義士祭。」【一九三三年三月】

「少年団では各班に巡回修養お話を開く。」【一九三三年三月】

「十月より少年団夜警開始。」【一九三三年十一月】

「九月十三日 藤根少年団の乃木祭。」【一九三四年十一月】

「少年団が毎土曜日に北藤根会館、日曜日に中野会館に集合してゐる。」【一九三四年十一月】

高橋峯次郎が少年団の運営に深く、また熱心に関与していたことがうかがえる。ただし少年団に関する記事は一九三〇年代の半ばで出なくなる。三二年の文部大臣訓令「児童生徒ニ対スル校外生活指導ニ関スル件」を機に文部省は学校を中心とした少年団の組織化を推進し、またイギリス発祥のボーイスカウトに対する軍や世論の批判ないし敬遠などもあって、全国的にみてもボーイスカウト系の少年団は三〇年代を通じて衰微していく。藤根少年団も例外ではなかったようだが、その点に関する高橋の苦悩や苦慮は『真友』には現れない。二九年五月の記事に「少年団の訓練は、少年の遊びたいといふ心を本として編み出されたもので、少年時代には最も必要なものである。又悪い癖を正すにも一番よい時である。そして愛国運動の土台となり実修と体験をするのである」とある通り、少年団の訓練が青年団や青年訓練所の訓練に自然に連続するものと考えていたのではないだろうか。

次に青年団に関する主な記事を見てみたい。

「十二月三十一日、藤根村青年団ノ雄弁会（藤根学校）。」【一九二六年十二月】

「招魂祭 八月十四日（旧十七日）、午後二時挙行。会員一同集合ノコト。青年団、少年団モ参拜。」【一九二七年七月】

「七月二十一日 和賀郡青年団運動会、藤根村第五位。」【一九二九年八月】

「八月二十一日より 藤根村青年団常識講座開催。」【一九二九年八月】

「二月二十二日 藤根村青年団の総会。団長に高橋徳孝、副団長に高橋重蔵、高橋泰三郎。」【一九三一年四月】

「青年団の主催模擬国会は八月二十八日に開かれたが盛会であつた。同窓会の話はない。活動写真会は九月三日に野中で開いた。」

【一九三二年九月】

「八月十八日藤根村の招魂祭挙行 式後に在郷軍人と青年団と聯合の武術会あり。」【一九三二年十月】

「九月一日北藤根の青年会館の開場式あり。三間に八間の平屋、図書館も附設す。」【一九三二年十月】

「八月二十六日の招魂祭に青年団聯合武術会を開催せり。」【一九三四年十一月】

「三月十日陸軍記念日、〔中略〕夜間中野長清水青年団主催の軍人及家族慰安演芸会。」【一九三九年三月】

「四月二十九日の天長節の式後、藤根学校で藤根村青少年団の結成入団式を行つた。」【一九四一年五月】

「五月九日藤根国民学校及青年団の運動会が開催された。満開すぎの桜花の下で、青年団の競技点数は旭昇三五、矯風三三、勇進二九、後藤二四、野中一〇。」【一九四一年五月】

「藤根村青年常会日割毎月 本団男二日女三日 野中男五日女八日 旭昇男十日女十五日 勇進男三日女十二日 矯風男五日女五日 後藤男四日女七日 長沼男十一日女八日」【一九四一年十二月】

「二月十九日より五日間青年道場を開催。入場生六十名。」【一九四二年三月】

「七月」三日に藤根校で青少年団の大会が開かれました。笹間、横川目、岩崎、江釣子、藤根の五ヶ村の青年団少年団三千人集合。」【一九四二年七月】

「十月」二十八日青少年団武道会。」【一九四三年冬】

「青年団割田班から真友経費に一六〇〔円〕寄贈さる。演芸会の収入から。」【一九四三年冬】

この記事を見る限り、平均的な、普通の青年団だったのではないだろうか。教化活動や本来の修養的な活動にそれほど熱心だったとも思えない。雄弁会や運動会などの娯楽的要素の濃い活動が多く報じられている。

る。一九四〇年代に入ってから「青年常会」「青年道場」の記事が出てくるが、これが青年団そのものの活動なのかどうか分からない。

なお、一九三一年四月の記事に団長・副団長の名前が出ている。『藤根郷土史』によれば、高橋徳孝は一九四五年中に短期間村長になっていて、在任時期はわからないが「歴代助役」のリストにも名前が出ている。高橋重蔵は四七年、高橋泰三郎は四六年に村会議員になっている。三人ともに藤根小学校校長にはなっていない。一般に村長や小学校校長が青年団の役員になるケースが多いが、彼らは、三一年当時は青年団のメンバー（つまり「青年」）だった可能性もある。

⑥ 青年たちの銃後活動

在郷軍人会の会報という性格もあって、銃後活動への協力の呼びかけは誌面で積極的に行われ、あるいはその活動が多く取り上げられている。ここでは青年たちによって行われた銃後活動の記事を拾って検討してみた。

「公主嶺独立歩兵大休本部歩兵軍曹加藤忠紀君よりの手紙〔前略〕少年団の慰問袋は大好評。僕も実に喜びました。別資あり女学生あり又お婆さん等の写真入りには兵士の喜ぶこと夥し。〔後略〕」
一九三二年一月

「藤根少年団十月十日班長会議、十一月一日慰問袋百九十九送る。十一月十四日黒沢尻駅にて警衛の助手をなす。十一月二十八日班長会議。十二月十四日義士祭。」
一九三二年一月

「出征兵の家に農業の手伝長沼の青年及郷軍班で斎藤君の家に田植、田の除草等の手伝。中野長清水で及川君千葉君の家に稲かりの手伝をなせりと。」
一九三三年十一月

「飛行場地ならし 九月まで毎日八百人の中等学校、青年学校生徒

が働く。」
一九三八年七月

「同〔三月〕二十二日 勤労報国団女子七名茨城県高萩工場に五月の勤務を終り帰る。〔七人の氏名省略〕。百円づつ持ちて。」
一九四〇年四月

「二月十二日青年学校生徒五十余名、釜石鉾山に勤労のため出発。」
一九四一年三月

「黒沢尻中学校生徒の稲刈作業奉仕謝礼より十五円を藤根村銃後奉公会に寄附さる。」
一九四二年十二月

「〔九月〕二十日より黒中生ノ稲刈奉仕隊来村。」
一九四三年冬

青年だけにかかわる銃後の活動の記事はこの程度で、思ったほど多くはなかった。おそらく出征兵士の見送りや集会などの村の行事には、青年団員ないし青年訓練所・青年学校生徒は当然参加していたものと思われるので、青年だけの行事は多くはなかったのかもしれない。

一九三八年の記事に飛行場での作業のことが出ていて、「飛行場」とあるのは藤根村後藤野に建設中の陸軍飛行場のことである。『藤根郷土史』の末尾に添付されている菊池敬一「高橋峯次郎伝」には「昭和十四年、藤根の後藤野に陸軍飛行場が県民の奉仕により建設されるといふ大事業がおこると、彼は連日その奉仕に参加した」とある。高橋峯次郎の関心事であったらしいが、この「真友」には飛行場関連の記事はあまりない。

⑦ 高橋峯次郎の青年教育論、青年への期待と不満

高橋峯次郎は時おり教育論らしい文章を掲載している。特に青年の教育を論じたもののうち、主なものは次の通りである。

「青年訓練所ニツキ、本年四月ノ勅令ニヨリ七月カラ各町村ニ青年訓練所トイフ□□設ケラレマシタ。満十六歳カラ二十歳マデノ青年

ハ入所シテ訓練ヲウクルノデス。

何ヲヤルカ。学科トシテハ修身公民科ニ普通科職業科等一年二百時間、教練ハ一年二百時間、教師ハ指導員トイツテ、学科ハ小学校教員ガナリ、教練ニハ在郷軍人ガヤルコトニナツタ。

外国デハ早くカラ少年団青年団ノ訓練ヲ国家ガ沢山費用ヲカケテヤツテ居ル。我が国モ列国ニ劣ラズ国ヲ進メテユクニハモット国民ガシツカリシテユカネバナラス。

今迄徴兵検査マデ野放ニシテオイタ青年ヲ集メテ訓練ヲヤルノデアルカラ、中ニハ訓練ヲウケルノガイヤダ、厄介ダ、ウルサイナドト思フ者モアルカモシレナイ。シカシヨク考ヘテ見ルトイヤデナイ、自分ノタメダ、進ンデ受クベキモノダ、小サナセマイ考ヘテ自分ノシゴトノ都合ガワルイ、身体ヲ自由ニセラレナイノハワルイナドト個人的気マナ心ヲ起シテハナラス。村ノタメニハ一人前ノ公民ト国民トシテハ、大切ナ皇国ヲ守ツテユクカヲ持タナケレバナラス。

吾レ吾レハ国家アツテノ吾レ吾レダ。万一ベチャントイッタ場合ニドウスル。青年訓練ガイヤダ、青年団少年団ノ集合ハイヤダ、軍人会ノ会合ハイヤダモアツタモノデナイ。青年訓練ハ進ンデ喜ンデ受クベキモノダ。【一九二六年七月】

「青年訓練の眼目 訓練の効果は軍事的にのみ顕はれるものではない。産業方面に於ても亦遺憾なく役立つ。規律正しく時間観念強く、協同精神旺盛にして団結力の大なることは如何なる仕事に直面しても優秀なる成績を挙げることが出来る。どこまでも完全なる国民の養成、平戦両時を通じて国家総動員の予行演習、青訓は決して政府の仕事ではない、国民それ自身の仕事であらねばならぬ。」【一九三四年四月】

「農村の少年は都会の少年のやうに活動写真やその他の好ましから

ぬ娯楽の誘惑はないが、動もすれば農事の手伝等のみ時を費し、夫れ以外、自己〔己〕の修養に力を竭し又修養のために個人的に親切に導いて呉れる人が少ない。小学校教員は職務上より見れば勿論都鄙を問はず、少年の指導に従事さるべき善の人ではあるが、今日の小学校教員の多忙なるは実に想像以上である。到底これ等の人のみ御願ひし得るものでない。職業の如何に拘らず少年教養の尊い分担を自発的社会奉仕の一端としてやるべきである。教員でも軍人でも、神官でも、僧侶でも、公吏でも、青年でも、少年を善導し一

村のため社会のため尽すべきである。」【一九三四年十一月】

一九二〇年代から三〇年代前半に書かれた青年教育論らしき文章の代表的なものである。これらから共通して読みとれるのは、まず高橋峯次郎が非常に素朴な愛国主義者であったこと、そしてその思想の根底にあったのは自発性（自発的奉仕の精神）であったことである。「素朴な」と書いたのは、例えばこの時期にしばしば見られたような観念的な神道思想や国体論を受け売りで振り回したような文章ではないということの意味している。これらの文章に限らず、『真友』全体から特定の思想の影響を読み取ることはできない。

一九三〇年代の後半以降になると、少し論調が変化してくる。この時期の文章の主なものを拾い出して検討してみたい。

「村の発達を計るに目前の利益にのみ考へては、村が富むやうでも後には衰へる。良い物産、良い人を造る村は将来良い村になれる。

学校教育が進められて、字を書き、本を読み、よく語る人が増えても、家庭が荒れ社会が荒れてゐては無駄仕事である。却つて金をかけて教育して家を滅ぼし村を悪くする。

農作物は、今年悪ければまた来年作り直すことが出来るが、子供は一回作なれば作り直しはできない。

村の青年は南方の暖い地方に沢山出稼してゐる。親たちは寒い雪

の中で借金軍と戦争してゐる。少しは故郷の家と村を思ふて弾丸を送れ。

徴兵検査過ぎない者は嫁取るな。本人も軍隊も損をする。【一九三七年一月】

「銃後の人々にお願ひ 一、百姓は米を沢山とること。(中略)十、青年は剣道柔道を大いにやれ。弾丸つきたら何でやる。【一九三八年七月】

「銃後の青年もつと第一線の将兵の苦勞を思へ。慰問の手紙も書かず、献金もせず、貯金もせず、剣道も、柔道も、角力もやらぬ。青訓にもなまける。他人のことでない、自分の体育だ。戦争はこれからだ。命のやりとりにつくりするな。

銃後の婦人会、熱がさめたのか、慰問袋も忘れたのか。

一般に学校教育〔が〕ゆるんだといふ人あり。ほんとうかうぞか、大人が確か〔に〕ゆるんできた。【一九三八年十月】

「賃金が高くなつたので百姓をやめてテマトリするといふもの増える。よい青少年が都会に吸はれてゆく。農村は何を吸ふて米をとる。男は皇国の為に海を越える。娘十九手が冷える。【一九三九年三月】

「青年学校々舎まだできない。生徒も出席少ない。遊んでゐて敵陣にさり込む勇氣ありや。

村の青年目をさませ。おやぢも何を見てゐるか。指導者も元氣だせ。【一九三九年十月】

「松田義一氏曰く、人間は最初の踏みだし百姓して土に親しみ汗をながして働くべしと。かうした人間なら軍人、教師、政治家、官吏、会社員、商人、大工、左官、職工、何でも勤まる。つまり初め百姓であれば他のどんな業に転じても忠実で質素で勤勉で持久力があり、人にも親切で愛嬌があり必ず大に成績があがる。これに反し

て最初の出發が百姓以外の職であるものは、たやすく百姓になれない。例外はあるにしても、まづなれぬものと見てよい。それどころか農業の学校にゐてさへ、もうなかなか百姓が辛くないやになつてくる。これは眞実の話である。この生きた事實―動かすべからざる現実から考へて、いかに百姓になることがむづかしいかがわかる。人生の踏出しにぜひ一度百姓になして置かねばならぬ所以もわかる。人間がどんな職業につくにも、一度はぜひ百姓をするがよいと考へてゐる。つまり日本の教育では十五、六才の少年時代に一、二年必ず百姓をさせる。さうして天地自然に人間をつくつてもらふ道理になる。これを骨格としてのち、学問で肉をつけたならば決して浮いた人間はできないことをかたく信ずる。

町の女学校の生徒の六、七割は農村からの入学者なのに、教育は相変らず奥様教育だ。友達が高等官の官吏と結婚したり交際したりする、甘い夢のやうなことを刺戟されて、もう農家へは結婚しないと心にきめてしまふ。我が家が先祖代々農を営んでゐることを忘れて―それは娘ばかりが悪いのぢやない。親の考へも悪い。

都会に住むものの多くは、百姓の尊さを忘れてゐる。都会に咲いた文化が何よりも優秀なものと考へこんで農民を侮り、いやしいものとしてゐる。それを言葉や行動に現はして恥ぢないのである。このごろ物の不足となつて、米が不足、木炭の不足によつて、農村といふものを〔が〕やうやく都会人にもわかるだらう。【一九四〇年一月】

「青年学校生徒の欠席多くなつた。百姓を忘れて銭とりやるためか。諸君の重大責務忘れてならぬ。

都会の青年、ほんには帰郷して先祖を拝め。【一九四〇年七月】
これらの文章では一貫して「村」や「百姓」が守るべきものとして措定され、それを破壊しかねない「都会」やその「都会」なるものに影響

された大人を批判し、青年たちが同様に影響されることを強く懸念している。農本主義と言えは言えるのかもしれないが、流布している思想の受け売りというよりは、自分の身の回りで現実に行っている事態を高橋なりに読み取って考えた社会批判のような文章である。一九三〇年代前半とは論調が明らかに違っているが、文章の素朴さという点では一貫している。

村の青年たちの一部が自家の農業に従事せず、「都会」の会社、工場、商店等に職を求めて村を離れていったことは、「高等科卒業生高橋清人、熊谷忠芳、長嶺良輔、加藤勝志、林崎盛、高橋文五郎、東京蒲田にある東洋精機株式会社に入る。田鎖円治、加藤作蔵、菅沼昌郎、花巻青年学校に入る」(一九三九年三月号の記事)、「立川飛行学校花巻道場に高橋善見、斎藤多美夫、高橋藤雄の三名」(四〇年四月号の記事)、「花巻青年学校」ないし「立川飛行機花巻道場」は、立川飛行機株式会社工場内に設置された青年学校で、入学者はその工場に就職した者であるらしいことが三九年七月号の記事からわかる)といった記事からもより具体的に理解される。あるいは四一年十二月号に、村を離れた(軍隊に入ったと思われる)青年からの、おそらくは『真友』の記事を読んだの感想と思われる「出稼者の多いのに驚きました」という便りの一節が出ている。さらに「●青年訓練所・青年学校の諸活動、諸実態」でも取り上げた「昭和十六年度 往復文書綴甲号 藤根青年学校」と題された簿冊中の「青年学校在籍者出稼状況調」によれば、当時三六人の生徒が出稼ぎに出ていることがわかる(県外が三〇人、県内は六人)。多くの青年たちが村を離れるという実態ないし実感が現実にあったのだろう。

ただ、高橋は、単に青年たちが(出稼ぎという一時的なものであっても)都会に移ってしまうことだけを懸念していたわけではなかった。右の文章からは農業が人間をつくる(はずだ)という信念が読み取れる。当時、同様の趣旨のものとしては「労作教育」「勤労教育」「作業教育」

といった教育論があったし、あるいは一九三八年から中等学校や高等教育機関でいっせいに集団勤労作業が導入されるといった実際の動きもあったが、やはり高橋峯次郎はそういった教育論を教育雑誌や教育書からそのまま切り取って論じているわけではなさそうである。非常にシンプルで素朴な農本主義的教育論である。

⑧「満洲」への誘い

青年が村を離れることに強い懸念を表明していた高橋峯次郎ではあったが、やはり「満洲」(以下「」省略)行きは別であった。主として青年たちに向けて満洲に行くことを勧める記事が時々出ている。次の通りである。

「満蒙に移住せんとするものは 1 永住の決意をもつこと 2 一度に沢山の金をもうける気ではならぬ 3 からだ強健でなくてはならぬ 4 多く働き粗末なものを食べる覚悟でなくてはならぬ」

【一九三二年六月】

「下ノ関から奉天まで朝鮮をへて約四十五時間、三等で約二十三円。又門司から商船で大連をへて奉天まで約六十時間三等賃金二十三元でも行ける。」【一九三二年六月】

「満洲国岩手村伊藤孫右工門君 広い満洲になぜこない。岩手県人が熱がない。他県の人たち(が)どんどん入り込むのに。」【一九三八年十月】

「同(三月)二十五日 長沼の彦右衛門氏の孫小原長一君、少年義勇軍として茨城県に出発。」【一九四〇年四月】

「茨城県内原訓練所小原長一君 義勇軍に来る人はありませんか。誰かよこして下さい。外の村では三人も四人も来てゐる。」【一九四〇年四月】

「小原康志君から皆様へ。意義ある紀元二千六百年に際し計〔図〕
らずも文部省より満洲建設勤勞奉仕隊々医附を嘱託され、七月一日
より九月三十日に至る九十二日間勤勞奉仕をなし、満洲各地を見学
いたしました。〔後略〕」【一九四〇年十一月】

「三月十四日 十五年度高等科卒業の中野〔の?〕高橋清次郎さん
の高橋寅男君、満洲の青少年義勇軍に採用され内原訓練所へ元氣よ
く見送人に挨拶して出発された（去年は小原長一君であった）。」
【一九四一年五月】

「八月九日藤根国民学校内に満洲開拓少年義勇隊の道場を開き、十
三日に終る。」【一九四一年九月】

「満洲北安省石長の伊藤孫右エ門氏、藤根の青年に來い來いと
ふ。」【一九四二年七月】

満洲の「開拓」に従事することは軍隊に入ることと準じた価値のある
こと（望ましいこと）とされていたのであろう。加えて、満洲ではおそ
らく農業に従事すること（開拓農民となること）が想定されていたか
ら、農業が人間をつくるという高橋峯次郎の信念にはむしろ合致するこ
とだったに違いない。

⑨先輩の青年たちからのメッセージ

戦時に入り、戦地にいる村出身の兵たちと村をつなぐメディアとして
その役割を拡大した『真友』であったが、その誌面に出てくる戦地等か
らの兵たちの手紙の文章の中に、先輩の青年たちに向けたメッセージ、
あるいは先輩の青年たちの指導を高橋峯次郎に期待するメッセージが多
数散見される。その一部を引用する。

「菊池弥作君、今は徒手教練を終り執銃教練をやつてゐます。青訓
生に御無沙汰してをります。青訓生の出席はよくありますか。」【一

九三三年三月】

「小松国次郎君 目下山間地で〇〇中です。徳太郎君にあひまし
た。一等兵に進級した。青年学校生徒に力ある訓練してください。」

【一九三八年三月「臨時号」】

「斎藤定男 銃砲弾、頭の上を飛ぶ。青年学校の生徒諸君にもよろ
しく。」【一九三九年七月】

「北支高橋治三郎君 青年学校の皆様はやつてゐますか。私は学問
がないのでこまります。先生、あとから来る青年に勉強をさせて下
さい。」【一九四〇年四月】

「菅沼英男より。青年学校の生徒諸君、最大の馬力をかけて国家総
力戦に大奮闘の事せう。此の時局に直面して我が村から精銳の青
年諸君を多く入隊せしめる先生の喜びはいかばかりかお察し申
し」ます。【一九四〇年十一月】

「菊池長七。〔中略〕青年学校の生徒にもよろしく頼みます。生徒に
手紙を出してゐますが、返事はきません。【一九四〇年十一月】

「北支加藤克巳。毎日風吹いて土をとばす。〇〇兵の教育がかりで
す。青年諸君によろしく。」【一九四一年三月】

「藤根、菅沼長蔵。第一線の兵隊さん、又郷土の皆さん、真友編輯
の高峯先生のなつかしきみを感じる事せう。給料など問題にせず、
減私奉公と老体の光頭をなで、我等青年に熱と力を吹きかける。村
の青年諸君、その熱と力を翼賛すべきでないか。二月四日。【一九
四一年三月】

「満洲高橋信雄。先生の御老体もお厭ひなく銃後の為、青年教育の
為、又満支にゐる将兵子弟の為、お骨折りのこと、我々陣中の者、
誰か其の感に打たれ涙の外有りません〔原文のママ〕。【一九四一
年五月】

「中支安部利孝、〔中略〕青年指導をたのみます。弟の甲子人も青年

学校にすゝめて下さい。」【一九四二年五月】

「菅沼義平 分会の査閲、今年も優秀の御祝ひ申（し）ます。青年学校の生徒にもよろしく。」【一九四一年十二月】

「斎藤求君、先日小原弘君に会いました。高橋福松君も元気です。今度来る人達も大いに訓練させて下さい。青年学校生徒にもよろしくお伝へ下さい。」【一九四二年七月】

「高橋与右工門、青年学校の皆様益々御健全の事と存じます。」【一九四二年七月】

「及川勝夫、〔中略〕難波〔破〕し生れて始〔初〕めて食へる椰子の実。青年学校生徒にもよろしく。」【一九四三年六月】

「弘前の伊藤義雄より時局下の青年校多忙なるべし〔との便り〕。」【一九四三年冬】

手紙のどの部分を誌面に採録するかという判断のところで、自分が言いたいことを取り出して先輩たちに語らせるといふ側面もあったかもしれないが、右のようなことが戦地等からの手紙に書かれていたこともおそらく事実であり、村と村の青年を支える高橋峯次郎の存在感と影響力の大きさが改めて認識される。

⑩ おわりに

『真友』には青年訓練所・青年学校にかかわる記事が多数掲載されている。それらは網羅的でもなく系統的でもないで、特定の部分を詳細に明らかにするための資料とはなりにくい。断片的な情報を集めてみると、青年訓練所・青年学校の諸実態やそこで中心的な役割を果たしていた高橋峯次郎という人物の姿が漠然とではあるが浮かんでくる。

ここで分類、整理した記事の中では「②青年訓練所・青年学校における訓練の実態」の内容がやはり青年訓練所・青年学校の役割を如実に表

現していたものと思われる。教練指導員の技量や実際の訓練の中身・程度まではわからないが、軍の直接的な関与や指導の実態がうかがえる。村の青年たちはおそらくここに入って軍隊を実感し、一種の覚悟をさせられたのではないだろうか。

青年訓練所・青年学校での教育の成果は「④先輩の青年たちからのメッセージ」で取り上げた多数の記事からうかがえる。おそらく実際に軍隊に入り、しかも戦地に送られて、青年訓練所や青年学校での経験、体験が何かありがたいものに感じられたのであろう。だからこそ後輩たちをしっかりと訓練してほしいというメッセージがたくさん出てくるのではないか。

しかし、そのメッセージは、直接には高橋峯次郎に向けて発せられている。高橋は教練指導員ではない。「⑦高橋峯次郎の青年教育論、青年への期待と不満」で検討したことをふまえて推察するならば、高橋の「村」や「百姓」への徹底したこだわりが、兵となって村を離れた青年たちに心の拠り所のようにイメージされたのではないだろうか。村を離れる（離れたがる）青年たちには批判的だった高橋峯次郎ではあったが、逆にそのことが青年たちから慕われる素地になったように思える。加えて、高橋峯次郎が自分の素朴な言葉で自分の考え方を表現していたことが、青年たちの高橋峯次郎に対する親しみやすさの情を増幅させていた面も考えられる。

『真友』の記事を拾ってみると、軍隊に入って兵士になって初めて軍隊なるものを知るのではなく、青年訓練所・青年学校やその教師たちを媒介にして村の青年たちが兵として仕立てられていく様子が浮かんでくるように思われる。

註

- (1) 高橋峯次郎の経歴は高橋峯次郎『藤根郷土史』所収の菊池敬一「高橋峯次郎伝」中の「履歴書」による。
- (2) 青年訓練所・青年学校の詳細は拙著『教育審議会の研究 青年学校改革』（野間教育研究所、一九九五年）参照。
- (3) 高橋峯次郎は在郷軍人であるが教練の指導員ではなかった。
- (4) 一九二〇年代から三〇年代における男子の中等学校進学率は一〇%台の後半、高等小学校進学率は六〇%台であった。
- (5) 『岩手近代教育史』第二巻（岩手県教育委員会企画・編集・発行、一九八一年）、第二章第十一節「岩手県立六原青年道場の創設」。
- (6) 少年団については『藤根郷土史』に簡単な記載がある。一九一三年という設立の時期は全国的に見てもきわめて早い。田中治彦『少年団運動の成立と展開』（九州大学出版会、一九九九年）や田中・上平泰博・中島純『少年団の歴史』（萌文社、一九九六年）ではこの藤根少年団は十分に位置づけられていない。

（お茶の水女子大学文教育学部、国立歴史民俗博物館共同研究員）

（二〇〇二年三月三〇日受理、二〇〇二年六月二八日審査終了）

Youth Training Center/Youth School and TAKAHASHI Minejiro

YONEDA Toshihiko

The SHINYU (True Friend), the local chapter newsletter of the Civilian Militia (Zaigo Gunjin Kai) in Fujine Village contained many articles which provided a picture of the actual state of educational activities at the Youth Training Center/Youth School and conveyed the views of TAKAHASHI Minejiro, a teacher (instructor) at these facilities. This paper picks up such articles, classifying and arranging them in relevant order, so as to reconstruct the actual conditions of the Youth Training Center/Youth School and of the activities conducted by Minejiro.

Regarding the activities at the Youth Training Center/Youth School, it was re-confirmed that the bulk of such activities consisted of military drills and maneuvers. One might also presume that there was direct military involvement.

Minejiro was what one might call a naive nationalist; in and after the 1930s in particular, he began to place a strong emphasis on character building through protecting the "village" and the "farmer" (farming) and through farming. Minejiro was not a drill instructor but it seems that his students at the Youth Training Center/Youth School looked up to him and after these youths left the village to become soldiers, they not only expressed their gratitude towards Minejiro, they looked to him to train their juniors with rigor. One might imagine that Minejiro, with his strong sense of mission to protect the village, provided a foundation to fall back on for the young men as they served in the army.

From all the articles in the SHINYU, it is clear that the extent of the roles played by the Youth Training Center/Youth School and its instructor in training the youth of the village for military service was considerable.